

過剰適応傾向の高い人々が持つ反応バイアス¹⁾

松本良恵^{*1}, 加納啓太^{*2}, 神 信人^{*3}

本研究は、過剰適応傾向の高い人々が自身の過剰適応傾向を実際以上に低く回答するという反応バイアスを持つことの確認を目的とした。大学生279名に質問紙調査を行い、過剰適応尺度（石津・安保, 2008）と、精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価を推測させた（他者評価の推測）。この「他者」として「自分を最もよくわかっている他者」を想定させた。過剰適応傾向の高い人々は重要な他者が自分を理解していないかのような回答をすることに抵抗感があるため、他者評価の推測は反応バイアスを低減させると考えられる。我々は自己評価の回答と他者評価の推測の回答の関係を検討した。その結果、バイアスの影響がない過剰適応行動尺度の他者評価の推測は、過剰適応尺度の測定値に対して、上に凸の曲線関係を示した。これにより、反応バイアスの存在が確認された。

キーワード：過剰適応, 自己評価, 他者評価の推測, 反応バイアス

問 題

社会の中でうまく適応しているように見える一方で、人知れず精神的な健康を損なっている人々の存在が指摘されている（e.g. 杉原, 2001）。このような人々に共通する傾向として過剰適応が挙げられる。過剰適応は、“環境からの要請や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うこと（石津・安保, 2008, p.23）”と定義されている。この定義は、問題なく社会生活を送るという意味での外的適応と、心の状態が安定していることを意味する内的適応の両輪が、バランスを保った状態を適応と呼ぶという考え方（cf. 福島, 1989; 岡本, 1965）に基づいている（石津・安保, 2007; 2008; 2009; 桑山, 2003; 益子, 2013）。ただし、この「過剰」は、「心の健康を損なうほど行き過ぎた、必要以上の」外的適応を指しており、この意味では「適応のバランスが崩れた状態」と言えるが、そ

※1 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了, 西南学院大学人間科学部心理学科嘱託実験助手, 玉川大学脳科学研究所特別研究員

※2 淑徳大学大学院総合福祉研究科心理学専攻修士課程修了, 淑徳大学心理臨床センター

※3 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

の一方で必要以上の外的適応のみで「過剰適応」と呼ばれることは無く、あくまでも内的適応の不全を伴うものであることには、注意が必要であろう。つまり「過剰適応」は、外的適応の過剰さによって特徴づけられる内的不適応として理解できる（小澤・下斗米，2015）。

この過剰適応は、精神的健康を損なうリスクファクターだと考えられている。たとえば、心身症の病前性格（小林・古賀・早川・中嶋，1994；三輪他，2001）として知られているほか、摂食障害（中井他，2002）、バーンアウト（水澤・中澤，2014）との関連が指摘されている。そのみならず、健常群においても抑うつ傾向（石津・安保，2007；2008；風間，2015）、対人恐怖心性、強迫観念と正の相関を示す（益子，2009）ことや、「自分の視線や体臭などが他者を不快にする」という加害恐怖の予測因子になること（下村・西口・石垣，2021）も指摘されている。

そのため、心理臨床、教育場面においても、こうした人々への予防的支援の必要性が指摘され（e.g. 風間，2015；山田，2010）、過剰適応傾向を測定するための尺度が開発されてきた（石津・安保，2008；桑山，2003；水澤，2014）。その中でも、石津・安保（2008）の過剰適応尺度は、最もよく使用されている尺度のうちの一つである（益子，2013）。この尺度は「他者配慮」、「期待に沿う努力」、「人からよく思われたい欲求」、「自己抑制」、「自己不全感」の五つの下位尺度から構成されている。前の三つは外的側面と呼ばれ、外的適応を維持もしくは上昇させるための行動や適応方略を測定し、後ろ二つは内的側面と呼ばれ自己抑制的な性格特徴を測定するとされる。外的側面と内的側面の得点がともに高い場合に、過剰適応の状態にあると考えられている。

過剰適応傾向の測定における問題点

外的な適応を高める努力の過剰さに特徴がある過剰適応傾向の測定には、回答の結果が故意にゆがめられることの少ない投影法を用いた方法（阿子島，1995；阿子島・伊澤，1999；阿子島・伊澤・大河内，2002；今川，2009；今川・譲，2007；Horiuchi et al., 2022）や、投影法と自己報告の心理尺度を組み合わせた方法（桑山，2003）も取られている。これは、言語を通じて自分の感情を表現する場合には、意識によるコントロールが働く可能性が大いにある（桑山，2003）ことが考慮されたためだと考えられる。実際、過剰適応傾向の高い人々は、他者からの否定的な評価に対する関心が高いと考えられる（阿部・石田・中島，2020）。そのような人々は、自らの認識している過剰適応傾向を正直に回答しない可能性があるのではないだろうか。

そもそも、過剰適応傾向の高い人々が内的な不適応を抱えていながらもそのことが周囲の人に気づかれにくいのは、「外的適応のための過剰な努力」や「内的な不適応を抱えていること」を他者に悟られないよう振舞うからだと考えられる。なぜ過剰適応傾向の高い人々は、このような行動をとるのだろうか。過剰適応傾向の高い人々の行動原理の一つは「外的適応に対する過剰な努力」であることから考えると、一つの可能性は「外的適応のための過剰な努力」や「内的な不適応を抱えていること」については伏せておくことを一種の適応方略として捉えていることが考え

られる。裏を返せば、そのような「過剰な努力」や「内的な不適応」を「外的適応を損なう事柄」と認識していると推測できる。したがって、過剰適応傾向の高い人々は、正直に答えた場合に外的適応を損ない得ることであれば、自分の欲求や感情、行動など様々な事柄について尋ねられた場合、実際の程度よりも低く回答する反応バイアスを持つ可能性がある。そうだとすれば、外的適応を目指して過剰な努力をすることや、他者の要求を優先し自分の欲求を無理に抑圧する過剰適応の特徴は、外的適応と内的適応のバランスが崩れた状態を意味するため、過剰適応傾向の高い人ほど、自分自身がそのような状態に陥っているとは認めながらも、過剰適応傾向を過小に回答する可能性があるだろう。

しかしこの点については、過剰適応尺度を開発した研究（石津・安保，2008；石津・斎藤，2011；風間・平石，2018；水澤，2014；霜村・小林・橋本，2014）においても、複数の過剰適応尺度の関連を検討した研究（井口・大久保・国里，2018；新井田，2014），過剰適応に関するレビュー論文（石津・安保・大野，2007；益子，2013；小澤・下斗米，2015）でも、ほとんど言及されていない²⁾。つまりこれらの研究では、過剰適応傾向の高い人々は外的適応を目指すあまりに内的適応を損なっているにもかかわらず助けを求めることができないが、心理尺度に対しては自分の過剰適応傾向について正直に答えるという前提を置いていることを意味する。本研究では、このような前提を置くことは、いささか恣意的ではないかと主張する。

過剰適応傾向の高い人々が持つ反応バイアス

本研究の主張を支持する証拠として、桑山（2003）の研究をあげる。この研究では、大学生を対象に、欲求不満場面における感情表現の仕方から過剰適応傾向について検討する目的でPFスタディを改変し、欲求阻害場面における外言（発言）と、内言（その時抱いた感情）をともに自由記述させる課題を開発している。そこでの外言は他者からの反応や評価を考慮する必要があるのに対して、内言は他者に知られるわけではないことから自分の評価の低下に直接つながるものではなく、本音を隠す必要がないものと考えられている（桑山，2003）。それにもかかわらず、外的適応が高く内的不適応の高い群、つまり過剰適応傾向の高い人々は、内言における「反抗や敵意（＝内的攻撃性）の抑制」がみられた。他者に反抗や敵意を示すことは、他者からの反感を買ったり、望ましくない評価を受けたりする可能性があることを考慮すると、過剰適応傾向の高い人々は自分の内言においてすらも他者からの評価、すなわち外的適応を気にして、自分の内的欲求や感情の表出を意識的にコントロールしていたと考えられる³⁾。

以上のことから、自己報告式の過剰適応尺度への回答には「その過剰適応傾向の高さゆえに、自分が過剰適応だとは回答しない」という過小反応バイアスが影響すると考えられる。

目 的

既に述べたように、過剰適応尺度の開発過程で、過小反応バイアスについて言及されたことはほとんどなく、実証的な検討は行われていない。そこで本研究では、正確に過剰適応傾向を測定する方法の開発に向けた、あくまでも予備的な検討として過剰適応傾向の高い人々が持つ反応バイアスを確認することを目的とする。そのためには、過剰適応尺度に対する回答が、過剰適応傾向の真値に比べて小さくなる反応バイアスがあること、さらにそのバイアスは過剰適応傾向の真値の高い人たちの間で生じ易いことを示す必要がある。しかし、反応バイアスの存在によって、肝心の真値の測定は困難である。そこで、過剰適応尺度への回答に比べて、より真値を反映していると考えられる別の指標を測定し、その値と過剰適応尺度の回答との関係を検討することで、間接的に過小反応バイアスの存在を確認する。

本研究で想定する別の指標とは、回答者に「自分のことを最もよくわかっている他者」を想定させ、その他者が回答者自身の過剰適応傾向についてどう評価するかを想像して回答させるというものである（以下、他者評価の推測とする）。もちろん、この回答にも上記の過小反応バイアスが生じる可能性がある。しかし、「自分のことを最もよくわかっている他者」を想定したうえで、その他者からの評価として「過剰適応的ではない」と回答することは、過剰適応傾向の高い人々にとって、単に自己評価する場合とは別の意味が生じると考えられる。それは、「最もよくわかっている他者ですら自分を理解していないと思っている」事の表明である。「最もよくわかっている他者」に対してすらも「自分のことを理解してくれない」と内心では思っているという表明は、自分の理解者をないがしろにする行為であり、そのような行為は外的適応を損なう可能性がある。そのため、過剰適応傾向が高いほど、そのような行為に対して抵抗感を抱くと予測される。そうした抵抗感から、他者評価の推測については過小回答をする傾向が低減され、より真値を反映した評価が期待できると考えられる。つまり、外的適応を高める努力を過剰にしてしまう人々が、自身の外的適応を維持するために過小回答をしてしまうのであれば、これを逆手に取り、過小回答することが外的適応を損なうような尋ね方をすることで過小回答が低減されるだろうという考えに基づいた方法である。

ただし問題はどのような過剰適応傾向に関する評価が適切なのかである。まずは行動的な側面に焦点を当てる必要があるだろう（小澤・下斗米，2015）。その理由は、例えば石津・安保（2008）の過剰適応尺度にあるような「頼まれたことは、とにかくやりとげないといけないと思う」といった意思や思考などの内的な性質は、いくら「自分のことを最もよくわかっている他者」でも、推測困難だと考えられるためである。そのように、他者から見て推測困難なものであれば、結局のところ「自分の傾向は他の人にはわからなくて当然」と判断され、「自分のことを最もよくわかっている他者ですら自分を理解していないと思っている」かのような回答をすること

への抵抗感は、弱まる可能性が高いと考えられる。さらに、過剰適応傾向の高い人々がどのような事柄について過小反応バイアスを持つ場合に、支援が届きにくくなり、そのことが問題になるかを考えると、それは「他者からの要請や期待に応えるために、自分の欲求を犠牲にする必要がある行動」に関するものだと考えられる（小澤・下斗米，2015）。したがって本研究では、外的適応の維持ないし上昇に寄与する一方で内的適応を損ない得る行動に焦点を当て、過小反応バイアスの存在を確認する。

以上を考慮して、本研究では加納（2020）が開発した「精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度」（以下過剰適応行動尺度とする）の自己評価および他者評価の推測をもとに、過小反応バイアスを検討する。この尺度は具体的には、自分の許容範囲以上の課題や仕事であっても引き受けてしまったり（①過重）、他者の期待に沿う形で率先して他の人のためになることをしたり（②率先）、他者の期待を裏切りたくないあまりに仕事などを断れなかったり、他の人に自分の抱えている仕事を頼めない（③頼めない・断れない）などの行動を尋ねる項目から構成されていた。これらの項目は、過剰適応傾向の高さと抑うつとが結びつく原因に「身体的・精神的負担を抱え込んでしまうこと」があるとの考えから、過剰適応傾向の行動的側面を測定するために作成された。もし過剰適応傾向の高い人々が過剰適応尺度に対して過小反応バイアスを持ち、かつ他者からの評価を推測する場合にそのバイアスが低減されるなら、他者評価の推測のほうがより過剰適応傾向の真値を反映すると考えられる。

そこで加納（2020）の過剰適応行動尺度の自己評価と他者評価の推測について測定し、それぞれの値と既存の過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値との関係について検討する。

議論の単純化のために、以下では極端な例を用いて過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）と過剰適応傾向の真値の関係から順に考えていく。まず過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）にバイアスが全く影響しないならば、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）をY軸に、過剰適応傾向の真値をX軸に取るとき、測定値と真値の関係は図1aのような一次の線形な関係になるだろう⁴⁾。それに対して、本研究の想定通り過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）に過小反応バイアスが影響し、過剰適応傾向の真値が高くなるほど、測定値が上がらなくなるならば、測定値と真値の関係は図1bのような上に凸の回帰曲線になるといえる。同様に、過剰適応行動尺度の自己評価にもバイアスが影響する場合、過剰適応行動尺度の自己評価をY軸に、真値をX軸に取ると、やはり測定値と真値は上に凸の回帰曲線を示すだろう（図1c）。ともにバイアスに影響される過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）と過剰適応行動尺度の自己評価に、同じような逓減傾向があるならば、この二つの自己評価の変数の間は一次の線形的な正の関係を示すだろう（図1d）⁵⁾。一方で過剰適応行動尺度の他者評価の推測が過剰適応傾向の真値を反映するならば、過剰適応行動尺度の他者評価の推測をY軸に、真値をX軸に取ると、この二つの変数は図1eのような一次線形的

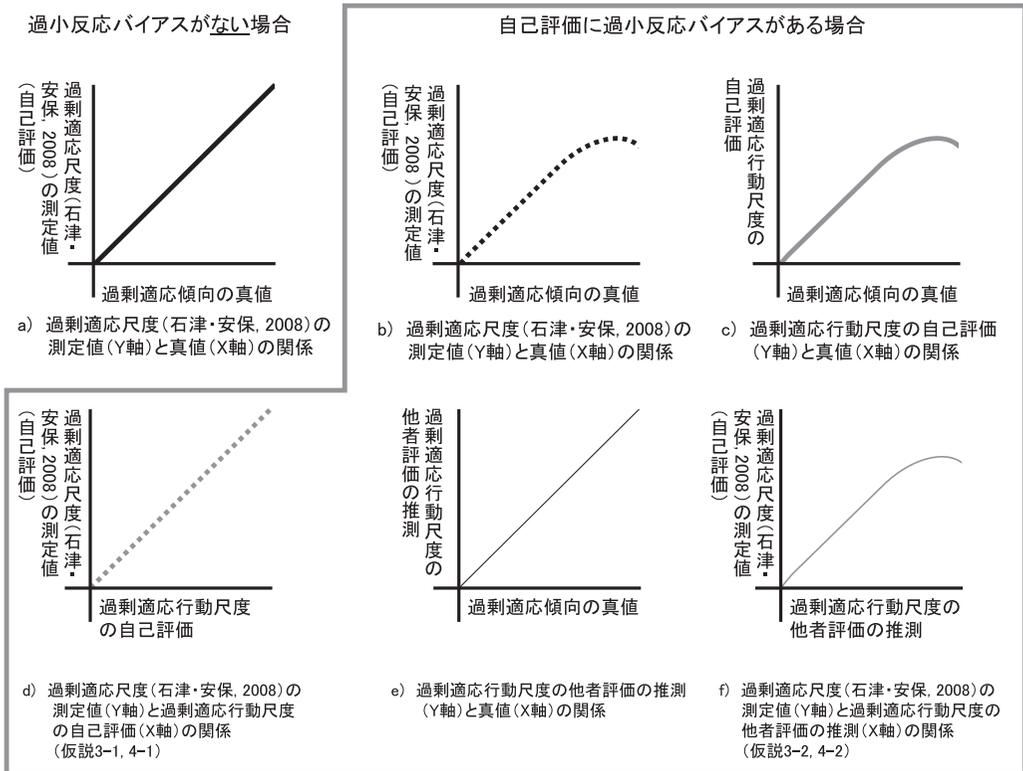


図1 過剰適応傾向の真値, 過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の測定値(自己評価), 精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測の関係の概念図

な正の関係を示すと考えられる。これらの変数間の関係から、過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の測定値(自己評価)をY軸に、過剰適応行動尺度の他者評価の推測をX軸にとると、他者評価の推測が大きくなるほど、過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の測定値(自己評価)は上がりきらなくなり傾きが小さくなるという、図1bと同様の上凸の曲線関係になると考えられる(図1f)。以上のような関係が認められれば、過小反応バイアスの存在を確認できたといえるだろう。

もちろん過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の測定値(自己評価)も、過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測も、過剰適応傾向の真値が高い人は全体として値が高くなるはずであることから、基本的にはこの三つの変数間には、正の相関があると考えられる。したがって、まずこのことを確認するために本研究では、過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の内的側面および外的側面の自己評価のそれぞれと、加納(2020)の過剰適応行動尺度の関係に関する仮説を立てる。

石津・安保(2008)の過剰適応尺度は理論上、下位尺度である内的側面と外的側面に分けて検討する必要がある。その理由は、仮に内的側面と外的側面を区別せず全項目の合計ないし平均値を尺度得点とした場合、その得点の高さが必ずしも内的側面と外的側面の「両側面の得点が共に

高い」ことを意味しないからである。とりわけ問題となるのは、外的側面の得点のみが極端に高く、過剰適応の定義に合致しない人々の尺度得点が高くなってしまい、「過剰適応傾向が高い」と判断される場合があることであろう。そこで、本研究でも過剰適応尺度を内的側面と外的側面に分け、以下二つの仮説を立てた。

仮説1：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面の測定値（自己評価）は、過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測と正の相関関係にある

仮説2：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面の測定値（自己評価）は、過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測と正の相関関係にある

以上の仮説が支持された場合に、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価は上に凸の関係にはなく（図1d参照）、他者評価の推測については上に凸の関係にある（図1f参照）ことを検証する。このためさらに以下四つの仮説を立てた。

過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面に関する仮説

仮説3-1：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価は上に凸の関係にはない

仮説3-2：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の他者評価の推測は上に凸の関係にある

過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面に関する仮説

仮説4-1：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価は上に凸の関係にない

仮説4-2：過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の他者評価の推測は上に凸の関係にある

方 法

本研究では、本研究の第二著者の修士論文（加納，2020）のために収集されたデータを用いて、再分析を行う。

分析対象者

関東地方の大学生。質問紙調査への回答に不備がなかった279名（男性101名，女性176名，その他2名⁶⁾，1年生146名，2年生58名，3年生55名，4年生16名，その他4名）。

分析対象とする変数

加納（2020）で行われた質問紙調査で収集された変数のうち、以下の3種類の変数を分析対象とする。

- (1) 「精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度」14項目の自己評価。「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で回答させた。
- (2) 「あなたのことを最もよくわかってきている他者」を想定し、その他者が(1)の14項目に対して回答者の行動をどう評価するかの回答。(1)と同じ5件法で回答させた。
- (3) 石津・安保(2008)の過剰適応尺度のうち、他者から気に入られたい、他者から認めてもらいたい、などの欲求を測定する「人からよく思われたい欲求尺度(5項目, $\alpha=.786$)(項目例:人から認めてもらいたいと思う)」、他者志向的な信念などを測る「他者配慮尺度(8項目, $\alpha=.787$)(項目例:相手がどんな気持ちか考えることが多い)」、自分の思いや考えを抑える傾向を測定する「自己抑制尺度(7項目, $\alpha=.898$)(項目例:心に思っていることを人には伝えない)」の三つの下位尺度についての自己評価。「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で回答させた。

表1 精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度

項 目	自己評価			他者評価の推測		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3
F1: 過重 [自己評価 $\alpha=.696$, 他者評価の推測 $\alpha=.757$]						
13. 誰かがやらなきゃいけない役割をやる羽目になることが多い。	.787			.811		
1. 1人では大変なことでも、任されたことは1人でやってしまう。	.374			.562		
14. 自分のキャパを考えずに、沢山のことを引き受けてしまいがちだ。	.645			.550		
2. 話し合いで誰も発言しないときは、自分から話を切り出しがちだ。	.486			.518		
12. どんなに大変な時でも、自分の仕事は1人でやり切る。	.130			.462		
F2: 率先 [自己評価 $\alpha=.723$, 他者評価の推測 $\alpha=.749$]						
10. 皆が面倒だと思うようなことでも、頼まれたら断らない。	.801			.653		
8. 大変そうな仕事は、他の人が抱えてもその人の負担になるので、自分でやってしまう。	.714			.649		
7. どんなに大変な時でも、頼まれたことはできるだけ断らない。	.613			.603		
5. 誰かがやらなきゃいけないことは、できるだけ他の誰かに任せる(R)。	.328			.441		
F3: 抱え込み [自己評価 $\alpha=.586$, 他者評価の推測 $\alpha=.635$]						
3. 人にものを頼みたいと思っても、結局頼めないことがよくある。			.458			.616
4. 新たに引き受けた仕事によって、他の仕事が疎かになることがある。			.585			.551
9. 頼まれて引き受けたことでも、実は断りたかったことが少なくない。			.463			.436
6. 頼まれたことでも、自分がやりたくないことははっきり断る(R)。			.141			.418
除外された項目						
11. 話すときは聞き手になりがちだが、本当は自分の話も聞いてほしい。						
固 有 値	8.618	1.874	1.224	9.352	2.136	1.273

本研究では、過剰適応傾向の高い人々の反応バイアスについて検討するため、精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度（表1）の各項目に対し、自己評価に加えて、「あなたのことを最もよくわかってきている他者」が自分自身のことをどのように評価するか、という他者評価の推測について回答を求めた。具体的にはまず、「最初に、あなたのことを最もよく分かっていると思う人を1人想定してください。その人があなたにとってどんな関係か、以下の記入欄に記入してください。」という教示で、特定の1人を思い浮かべてもらった。その後、「その人が、あなたの普段の行動についてどのように思っているかお伺いします。あなたの普段の行動が以下の項目にどれくらい当てはまるか、その人に尋ねたとしたら、どのように回答すると思いますか？その人が選びそうな選択肢の数字1つに○をつけてください。」と教示し、回答させた。

石津・安保（2008）の過剰適応尺度は本来5因子の尺度だが、使用したデータセットには残りの「期待に沿う努力」と「自己不全感」の下位尺度は含まれていなかった。「期待に沿う努力」が測定されなかった理由は、加納（2020）では、本人の特性としての過剰適応傾向の高い人々が「精神的不調を引き起こす過剰適応行動」をとることにより、精神的不調につながるというモデルを検証することが目的だったことから、過剰適応傾向の中でも行動的な部分に焦点が当てられている「期待に沿う努力」をモデルに含めた場合、「過剰適応的な行動が、過剰適応行動を引き起こす」という、統計的アーティファクトによる同義反復的な因果モデルを仮定することになるためだった。また「自己不全感」も、因果モデルの従属変数である精神的不調との関連が強くなることが予想されたことから、測定されなかった。そのため本研究では「人からよく思われたい欲求」と「他者配慮」を合わせた15項目の平均を過剰適応の外的側面（ $\alpha=.831$ ）、自己抑制を内的側面として分析を行った。

研究倫理

本研究は、令和元年度淑徳大学大学院総合福祉研究科研究倫理委員会の承認を得て実施されている（承認番号：19-120）。

結 果

精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度の因子分析

先行研究である加納（2020）では、自己評価の項目をもとに因子分析が行われたが、本研究では、他者評価の推測が過剰適応傾向の真値を反映していると考え、表1の14項目に対する他者評価の推測を用いて探索的因子分析を行った（最尤法・斜交回転、SAS 9.4による）。負荷量が.40に満たない1項目を除外し、最終的に表1に示す3因子構造が認められた。加納（2020）を参考に、次の通り因子名を付けた。第1因子は自分ができる範囲を超えて仕事や作業をこなす「過重」因子、第2因子は大変そうな仕事を自ら引き受ける「率先」因子、第3因子は負担を感じて他の

人に何かを頼みたいと思っても頼めない、ないし本当は引き受けたくないことであっても断り切れずに抱え込む、「抱え込み」因子とした⁷⁾。他者評価の推測の各因子の項目を平均し、三つの下位尺度を作成した。自己評価の項目も、他者評価の推測に合わせて三つの下位尺度を作成した。この三つの下位尺度は、過剰適応行動の異なる側面の測定を目的として開発されたことから、以降の分析では各下位尺度は別々に分析を行う。

過剰適応尺度と過剰適応行動尺度の自己評価、他者評価の推測の関係の検討

石津・安保(2008)の過剰適応尺度の下位尺度(自己評価)、過剰適応行動尺度の各下位尺度(自己評価および他者評価の推測)の相関関係を表2に示す。

まず、仮説1「過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の内的側面の測定値(自己評価)は、過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測と正の相関関係にある」と、仮説2「過剰適応尺度(石津・安保, 2008)の外的側面の測定値(自己評価)は、過剰適応行動尺度の自己評価および他者評価の推測と正の相関関係にある」を検証する。石津・安保(2008)の過剰適応尺度の内的側面(自己評価)と、過剰適応行動尺度の自己評価(過重尺度: $r=.165, p<.01$, 率先尺度: $r=.348, p<.0001$, 抱え込み尺度: $r=.513, p<.0001$)、他者評価の推測(過重尺度: $r=.198, p<.01$, 率先尺度: $r=.339, p<.0001$, 抱え込み尺度: $r=.344, p<.0001$)は、いずれも有意な正の関係が認められた。同様に石津・安保(2008)の過剰適応尺度の外的側面(自己評価)とも、過剰適応行動尺度の自己評価(過重尺度: $r=.441, p<.0001$, 率先尺度: $r=.494, p<.0001$, 抱え込み尺度: $r=.552, p<.0001$)および、他者評価の推測(過重尺度: $r=.448, p<.0001$, 率先尺度: $r=.407, p<.0001$, 抱え込み尺度: $r=.295, p<.0001$)の全てで有意な正の関係が認められた。このことか

表2 石津・安保(2008)の過剰適応尺度と、精神的不調を引き起こす過剰適応行動尺度(自己評価および他者評価の推測)の相関分析の結果

	<i>M (SD)</i>	1	2	3	4	5	6	7
石津・安保(2008)の過剰適応尺度(自己評価)								
1. 過剰適応 内的側面	3.272 (0.928)							
2. 過剰適応 外的側面	3.699 (0.598)	.481***						
過剰適応行動尺度 自己評価								
3. 過重尺度	3.189 (0.778)	.165**	.441***					
4. 率先尺度	3.104 (0.774)	.348***	.494***	.577***				
5. 抱え込み尺度	3.312 (0.754)	.513***	.552***	.313***	.501***			
過剰適応行動尺度 他者評価の推測								
6. 過重尺度	3.175 (0.859)	.198**	.448***	.635***	.475***	.278 ***		
7. 率先尺度	3.210 (0.853)	.339***	.407***	.485***	.632***	.414 ***	.576***	
8. 抱え込み尺度	3.149 (0.830)	.344***	.295***	.269***	.395***	.513 ***	.273***	.463***

** $p<.01$ *** $p<.0001$

ら、仮説1と仮説2は支持された。

次に、仮説3-1「過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価は上に凸の関係にはない」および、仮説3-2「過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の他者評価の推測は上に凸の関係にある」について検討する。このため、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面（自己評価）を従属変数として、過剰適応行動尺度の三つの下位尺度（仮説3-1においては過剰適応行動尺度の自己評価，仮説3-2においては過剰適応行動尺度の他者評価の推測）の一次と二次の項を投入し重回帰分析を行う（Hoel, 1971 浅井・村上訳1981）。ここで求められる重回帰式は、過剰適応尺度の測定値に対する過剰適応行動尺度の二次関数である。したがって本研究の仮説が正しければ、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）を従属変数とした場合は、独立変数に過剰適応行動尺度の自己評価の二乗項を投入しても偏回帰係数は有意にならず、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）と過剰適応行動尺度の自己評価とは上に凸の関係にない（仮説3-1）ことが示されるだろう。それと同時に、他者評価の推測の二乗項を独立変数に投入した場合には偏回帰係数が負の値で有意になり、上に凸の関係がある（仮説3-2）ことが示されるだろう。

この考えに基づき、仮説3-1について検証する。過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面（自己評価）を従属変数に、独立変数として過剰適応行動尺度のうち、まずは過重尺度の自己評価に加えて、過重尺度の自己評価の二乗を投入し、重回帰分析を行った。その結果、予測通り過重尺度の二乗項は有意ではなかった（ $\beta=0.147$, $t=0.39$, $p=.695$ ）（表3⁸⁾，図2a）。次に、率先尺度を独立変数として同様の分析を行った結果、率先尺度の二乗項も有意ではなかった（ $\beta=0.007$, $t=0.02$, $p=.982$ ）（表3，図2b）。同じように、抱え込み尺度を独立変数として分析を行ったところ、二乗項は有意ではなかった（ $\beta=-0.093$, $t=-0.28$, $p=.781$ ）（表3，図2c）。以上の結果から、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面と過剰適応行動尺度の自己評価には上に凸の関係は認められず、仮説3-1は支持された。

次に、他者評価の推測に関する仮説3-2を検証するために、同様の分析を、独立変数を過重尺度の他者評価の推測と過重尺度の他者評価の推測の二乗項に替えて行ったところ、予測通り二乗項の偏回帰係数が負の値で有意だった（ $\beta=-1.049$, $t=-3.24$, $p=.001$ ）（表3，図2d）。率先尺度の他者評価の推測に関しては、二乗項の偏回帰係数が負の方向で有意傾向だった（ $\beta=-0.531$, $t=1.74$, $p=.083$ ）（表3，図2e）。抱え込み尺度については二乗項が有意ではなかったが、偏回帰係数は負の値ではあった（ $\beta=-0.189$, $t=-0.62$, $p=.536$ ）（表3，図2f）。以上から、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面と他者評価の推測の過剰適応行動尺度の間には、有意ではない結果もあるが、偏回帰係数の値としては予測通り負の方向であり、両者の間には上に凸の関係が見られた。したがって仮説3-2は大筋で支持された。

表3 仮説3-1, 3-2, 4-1, 4-2に対する分析の結果(重回帰分析)

	β	$b (SE)$	t	p	調整済み R^2	F	p
【仮説3-1】従属変数：過剰適応尺度(石津・安保, 2008) 内的側面(自己評価)							
過重尺度					.021	3.93	.021
自己評価	0.019	0.023 (0.447)	0.05	.959			
自己評価の二乗項	0.147	0.027 (0.068)	0.39	.695			
率先尺度					.115	19.05	<.0001
自己評価	0.341	0.409 (0.393)	1.04	.300			
自己評価の二乗項	0.007	0.001 (0.063)	0.02	.982			
抱え込み尺度					.258	49.32	<.0001
自己評価	0.604	0.7430 (0.409)	1.82	.070			
自己評価の二乗項	-0.093	-0.018 (0.064)	-0.28	.781			
【仮説3-2】従属変数：過剰適応尺度(石津・安保, 2008) 内的側面(自己評価)							
過重尺度					.068	11.13	<.0001
他者評価の推測	1.231	1.328 (0.349)	3.81	.0002			
他者評価の推測の二乗項	-1.049	-0.179 (0.055)	-3.24	.001			
率先尺度					.118	19.63	<.0001
他者評価の推測	0.861	0.936 (0.332)	2.82	.005			
他者評価の推測の二乗項	-0.531	-0.092 (0.053)	-1.74	.083			
抱え込み尺度					.113	18.71	<.0001
他者評価の推測	0.530	0.592 (0.342)	1.73	.084			
他者評価の推測の二乗項	-0.189	-0.035 (0.056)	-0.62	.536			
【仮説4-1】従属変数：過剰適応尺度(石津・安保, 2008) 外的側面(自己評価)							
過重尺度					.192	34.07	<.0001
自己評価	0.088	0.068 (0.262)	0.26	.797			
自己評価の二乗項	0.358	0.042 (0.040)	1.05	.294			
率先尺度					.239	44.57	<.0001
自己評価	0.475	0.367 (0.235)	1.56	.120			
自己評価の二乗項	0.020	0.002 (0.038)	0.06	.949			
抱え込み尺度					.311	63.78	<.0001
自己評価	-0.132	-0.105 (0.254)	-0.41	.680			
自己評価の二乗項	0.693	0.085 (0.040)	2.16	.032			
【仮説4-2】従属変数：過剰適応尺度(石津・安保, 2008) 外的側面(自己評価)							
過重尺度					.207	37.19	<.0001
他者評価の推測	1.040	0.724 (0.208)	3.49	.001			
他者評価の推測の二乗項	-0.602	-0.066 (0.033)	-2.02	.045			
率先尺度					.160	27.39	<.0001
他者評価の推測	0.336	0.235 (0.209)	1.13	.261			
他者評価の推測の二乗項	0.073	0.008 (0.033)	0.24	.808			
抱え込み尺度					.101	16.62	<.0001
他者評価の推測	-0.463	-0.334 (0.222)	-1.51	.133			
他者評価の推測の二乗項	0.772	0.091 (0.036)	2.51	.013			

このことから、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の内的側面においては過剰適応傾向の真値が高くなるほど、自らの過剰適応傾向を過小に回答するバイアスの存在が確認された。

次に過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面に関する、仮説4-1「過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価は上に凸の関係にない」を検証する。この仮説が正しければ、内的側面と同様に過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）を従属変数とした重回帰分析を行った場合、過剰適応行動尺度の自己評価の二乗項は有意にならないだろう。過重尺度の自己評価と、過重尺度の自己評価の二乗項を独立変数とした重回帰分析を行ったところ、予測通り二乗項は有意ではなかった（ $\beta=0.358$, $t=1.05$, $p=.294$ ）（表3，図2g）。率先尺度に関しても、自己評価の二乗項は有意ではなかった（ $\beta=0.020$, $t=0.06$, $p=.949$ ）（表3，図2h）。しかし、抱え込み尺度では予測に反して自己評価の二乗項が有意だった（ $\beta=0.693$, $t=2.16$, $p=.032$ ）（表3，図2i）。ただし偏回帰係数が正の値であることから、上に凸ではなく下に凸の曲線になっていることがわかる。したがって、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面（自己評価）と過剰適応行動尺度の自己評価の間には上に凸の関係は認められず、仮説4-1は支持された。

次に、仮説4-2「過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の他者評価の推測は上に凸の関係にある」について検討するために過剰適応行動尺度の他者評価の推測を独立変数とした分析を行う。この仮説が正しければ、他者評価の推測の二乗項が有意になるだろう。過剰適応尺度（石津・安保，2008）の外的側面を従属変数として、過重尺度の他者評価の推測と過重尺度の他者評価の推測の二乗項を独立変数とした重回帰分析を行ったところ、予測通り二乗項の偏回帰係数が負の値で有意だった（ $\beta=-0.602$, $t=2.02$, $p=.045$ ）（表3，図2j）。しかし、独立変数を率先尺度にした場合は、予測に反して二乗項の偏回帰係数の値は有意ではなかった（ $\beta=0.073$, $t=0.24$, $p=.808$ ）（表3，図2k）。抱え込み尺度を独立変数にした場合は、二乗項の偏回帰係数は有意だったが、その値は正の値であり予測とは逆の結果になった（ $\beta=0.772$, $t=2.51$, $p=.013$ ）（表3，図2l）。外的側面に関する以上の結果から、仮説4-2は部分的にしか支持されなかった。

過剰適応行動尺度のうち過重尺度を用いた場合は、過剰適応傾向の真値が高いほど自己の過剰適応傾向を低く回答する過小反応バイアスの存在が確認できた。しかしながら、率先尺度および抱え込み尺度を用いた場合には、過小反応バイアスは確認できなかった。

考 察

本研究の目的は、過剰適応傾向の高い人々が持つ過小反応バイアスの存在を確認することにあった。このため本研究では、過剰適応行動尺度における他者評価の推測が過剰適応傾向の真値と

一次の正の線形関係にあると仮定し、その仮定が正しい場合に、過剰適応尺度（石津・安保、2008）の測定値（自己評価）と、過剰適応行動尺度の自己評価、他者評価の推測がどのような関係になるかについての仮説を立て、これを検証した。

分析の結果、まずは石津・安保（2008）の過剰適応尺度の内的側面および外的側面と、過剰適応行動尺度の自己評価と他者評価の推測は、ともに正の相関関係にあることが確認された（仮説1, 2）。次に、過剰適応尺度（石津・安保、2008）の測定値（自己評価）を従属変数とした場合に、過剰適応行動尺度の自己評価は二次の関係にはないが、他者評価の推測においては二次の関係がみられることを検証した。その結果、内的側面では、本研究で測定した過重尺度を用いた場合に最もよく過小反応バイアスの存在を確認できた（仮説3-1, 3-2）。一方で、外的側面では過重尺度を用いた場合は過小反応バイアスの存在を確認できたが、率先尺度、抱え込み尺度では確認できなかった（仮説4-1, 4-2）。

本研究の意義

これまで過剰適応傾向の測定は、自己報告の心理尺度によって可能だと考えられてきた。これに対して本研究は、次のような根本的な疑問を投げかけた。それは、「『外的な適応を目指すあまりに、内的な適応を損なっているにもかかわらず、助けを求めることができない』人々が、なぜ自己報告の心理尺度では正直に自分の過剰適応傾向について答えると想定できるのか」というものであった。こうした疑問を支持する指摘として“過剰適応的と呼ぶことがふさわしい青年は、広く適応的な青年とみられている青年の一群を形成している（杉原、2001, p.267）”ともある通り、一見すると社会的に適応しているにもかかわらず、内的不適応を抱えている者を他者が見つけ出すことは難しい。それゆえ、“不適応に陥った子どもが過剰適応的だったと結果的に述べることはできない可能性がある（石津・安保・大野、2007, p.52）”とも危惧されている。さらに、たとえ支援の手が届いたとしても、過剰適応傾向の高い人は外的適応を意識して自身の思いを抑圧することが予想される。このことから、当人の認知や行動の偏りを緩和するための支援者の関わりは困難になることも考えられる。しかし、本邦における過剰適応尺度開発において、本研究で投げかけた疑問に関する言及は無いに等しい状況だった。もちろん、尺度を開発する段階でこうした疑念に言及することは、その尺度の信頼性を脅かしかねないことから、仮にこの根本的な問題がこれまで黙過されていたとしても不思議ではない。このような問題に着目し、過小反応バイアスの存在を実証的に示そうと試みたことは、過剰適応研究に対する本研究の最大の貢献である。本研究では、過剰適応尺度の自己報告における過小反応バイアスの存在を確認した。これにより、現存の過剰適応尺度に対する測定値がそれほど高くはない人たちの中にも、支援を必要とする人たちがいる可能性が実証的に示された。今後は、この過小反応バイアスを測定する方法の開発および、バイアスを低減する方法を明らかにすることが求められる。

今後の課題

本研究は、あくまでも過小反応バイアスの存在を確認する最初の段階として位置付けられる。そのため、今後さらに研究を蓄積していくために、本研究のいくつかの課題について言及する。

そのうちの一つは、石津・安保（2008）の過剰適応尺度の外的側面に対する過小反応バイアスが過重尺度を用いた場合は確認され、率先尺度や抱え込み尺度では確認できないというように結果が一貫しなかったことがあげられる。このことを検討するため、外的側面の下位尺度である「よく思われたい欲求」と「他者配慮」の各項目内容に注目すると、「自分をよく見せたいと思う（よく思われたい欲求）」、「やりたくないことでも無理をしてやることが多い（他者配慮）」などの項目は、「外的適応を志向している行為とは限らない項目」（小澤・下斗米，2015）だと言える。言い換えれば、外的適応行動の背景に自己利益追求的、ないし損失回避的な行動原理の存在を示唆する項目であり、このような行動原理の表明は、外的適応を損なう可能性が高いと思われる。一方で、「相手にきらわれないよう行動する（よく思われたい欲求）」や、「相手がどんな気持ちか考えることが多い（他者配慮）」などは、「内的適応を犠牲にしているとは限らない項目」（小澤・下斗米，2015）だと言える。これらの質問項目への回答が高い値をとっても、外的適応を損なうことはないように思える。つまり、過剰適応尺度の外的側面には過小反応バイアスが強く働きそうな項目と、そうではない項目が混然一体としているのである。本研究の結果が一貫しなかったことは、このような点に由来していたのかもしれない。これについては今回使用した過剰適応尺度の構成概念妥当性と直結する問題であることから、別の過剰適応尺度を用いた検討が必要になると考えられる。

二つ目の課題として、抱え込み尺度において過小反応バイアスが確認できなかったことを挙げる。これに対する解釈の一つは、頼みたいと思いつつも「頼めない」、断りたいと思いつつも「断れない」などの『行動しない』という行動であることから、表出していない行動については他者からはわからないと判断された、というものである。もう一つの可能性は、「頼みたい」、「断りたい」という感情的側面を含む行動だったために、やはり他者からはわからないと判断された、というものである。すなわち、今回評定させた行動は他者評価の推測について低く回答することへの抵抗感が高まらないものだったと考えることができる。このことから、感情的な側面を含まない行動や、表に現れる行動に関する評価を用いて過小反応バイアスを確認する必要があると考えられる。

三つ目の課題は、今回の結果が本当に本研究で想定していたプロセスによって生じていたかが未検討な点である。本研究では過剰適応傾向が高い人々の過小反応バイアスが「自分をわかってくれている他者として想定した人物が『自分をわかってくれていない』と表明することに対する抵抗感」によって打ち消されると考えた。しかし、そのような抵抗感を本当に感じていたかは、検証していない。したがって今後、過剰適応傾向の高い人々がそのような抵抗感を抱くかどうか

を明らかにしていく必要がある。そのうえで、過剰適応傾向の高い人々にとっては、この抵抗感が過剰適応的だと表出することを促すならば、臨床場面における応用の可能性も広がると考えられる。加えて、今回の結果が過剰適応行動尺度の他者評価の推測に対して「過剰適応傾向が高い人ほど過大回答する」ことで得られた可能性についても確認する必要があるだろう。これについては過剰適応の高い人々が、真値以上に過大に回答する心理プロセスは現時点では想定できなかったことから、この点に対する検討は見送った。今後、関連しうる要因を検討することも求められるだろう。

最後に、本研究は既存の過剰適応尺度が役に立たないと主張するものではないことは、言及しておきたい。複数の研究により妥当性や信頼性が確認されていることから（e.g. 井口・大久保・国里, 2018; 新井田, 2014）、過剰適応傾向を持つ人々の全体像を把握するうえで、既存の尺度に問題はない（小澤・下斗米, 2015）。ただし、本研究による知見に基づけば、既存の過剰適応尺度の測定値をもとに支援対象となる人々を見出す場合は、過小反応バイアスの存在を考慮したうえで、その支援対象の範囲を広く設定することが必要だと考えられる。このことは、支援が届きにくい過剰適応傾向の高い人々に向けた支援を念頭に置く場合に、重要になってくるだろう。

謝辞

調査にご協力くださった学生の皆様、調査実施の機会を与えてくださった先生方に、深く感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部 夏希・石田 弓・中島 健一郎 (2020). アレキシサイミアがストレス経験と評価懸念を介して過剰適応に及ぼす影響 心理臨床学研究, 37, 571-581.
- 阿子島 茂美 (1995). 投影法による過剰適応の測定 日本教育心理学会総会発表論文集, 37, 277.
- 阿子島 茂美・伊澤 正雄 (1999). 投映法による過剰適応の測定：小学生用 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 214.
- 阿子島 茂美・伊澤 正雄・大河内 範子 (2002). 投影法による過剰適応の測定Ⅱ：中学生用 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 540.
- 浅井 継悟 (2012). 日本における過剰適応研究の研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 283-294.
- 福島 章 (1989). 性格と適応 福島 章 (編) 性格心理学新講座 第3巻 適応と不適応 (pp.3-37) 金子書房
- Hoel, P. G. (1971) *Introduction to Mathematical Statistics*. New York: John Wiley & Sons. (ホーウェル, P, G, 浅井 晃・村上 正康 (訳) (1981) 初等統計学 培風館)

- Horiuchi, F., Yoshino-Ozaki, A., Hattori, H., Hosokawa, R., Nakachi, K., Ito, R., Miyama, T., Tachibana, Y., Inoue, S., Kawabe, K., & Ueno, S. (2022). Expression of overadaptation in children through drawing a man as a projective measure: A community sample study. *Pediatrics International*, 64, e14919.
- 井口 聖香・大久保 街亜・国里 愛彦 (2018). 新たな過剰適応傾向尺度作成の試み 日本認知・行動療法学会発表論文集, 44, 446-447.
- 今川 峰子 (2009). 投影法による会話距離を利用した過剰適応児の診断 (2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 137.
- 今川 峰子・譲 西賢 (2007). 投影法による会話距離を利用した過剰適応児の診断 (1) 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 138.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2007). 中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 271-288.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究—個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から— 教育心理学研究, 57, 442-453.
- 石津 憲一郎・安保 英勇・大野 陽子 (2007). 過剰適応研究の動向と課題—学校場面における子どもの過剰適応— 学校心理学研究, 7, 47-57.
- 石津 憲一郎・斎藤 英俊 (2011). 大学生用過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会大会発表論文集, 44, 156.
- 加納 啓太 (2020). 抑うつを高める過剰適応とはどのようなものか?—その背景にある認知・行動プロセスの検討— 淑徳大学大学院総合福祉研究科心理学専攻 修士論文 未刊行.
- 風間 惇希 (2015). 大学生における過剰適応と抑うつに関連—自他の認識を背景要因とした新たな過剰適応の構造を仮定して— 青年心理学研究, 27, 23-38.
- 風間 惇希・平石 賢二 (2018). 青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討—関係特定性過剰適応尺度 (OAS-RS) の開発を通して— 青年心理学研究, 30, 1-23.
- 小林 豊生・古賀 恵理子・早川 滋人・中嶋 照夫 (1994). 心理テストから見た心身症—パーソナリティと適応様式から見た心身症— 心身医学, 34, 105-110.
- 桑山 久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-491.
- 益子 洋人 (2009). 高校生の過剰適応傾向と抑うつ, 強迫, 対人恐怖心性, 不登校傾向との関連—高等学校2校の調査から— 学校メンタルヘルス, 12, 69-76.

- 益子 洋人 (2013). 過剰適応研究の動向と今後の課題 文学研究論集, 38, 53-72.
- 三輪 雅子・上里 一郎・松野 俊夫・村上 正人・桂 戴作・堀江 孝至 (2001). 心療内科受診者の過剰適応傾向の検討 心身医学, 41, 574.
- 水澤 慶緒里 (2014). 成人用過剰適応傾向尺度 (Over-Adaptation Tendency Scale for Adults) の開発と信頼性・妥当性の検証 応用心理学研究, 40, 82-92.
- 水澤 慶緒里・中澤 清 (2014). 小学校教師のバーンアウトと過剰適応傾向との関連—問題行動児にも注目して— パーソナリティ研究, 23, 60-63.
- 中井 義勝・久保木 富房・野添 新一・藤田 利治・久保 千春・吉政 康直・稲葉 裕・中尾 一和 (2002). 摂食障害の臨床像についての全国調査 心身医学, 42, 729-737.
- 新井田 はつよ (2014). 過剰適応に関する尺度の検討: 2つの尺度を用いて 北星学園大学大学院論集, 5, 103-114.
- 岡本 夏木 (1965). 青年期の欲求と行動 坂田 一・林 保・岡本 夏木・今井 孝太郎・一谷 彌 青年の心理と適応 (pp.121-157) 福村出版
- 小澤 拓大・下斗米 淳 (2015). 過剰適応研究の体系化と今後の課題—過剰適応の防止に向けて— 専修人間科学論集 心理学篇, 5, 15-22.
- 下村 寛治・西口 雄基・石垣 琢磨 (2021). 加害型TKSとSADの予測因子—BIS/BASおよび過剰適応に注目した探索研究— パーソナリティ研究, 29, 150-158.
- 霜村 麦・小林 正幸・橋本 創一 (2014). 児童生徒用過剰適応尺度の作成の試み 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 10, 15-23.
- 杉原 保史 (2001). 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, 19, 266-277.
- 山田有希子 (2010). 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連 九州大学心理学研究, 11, 165-175.

注

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第62回大会にて報告された。
- 2) ただし、数少ない例外として、桑山 (2003) と浅井 (2012) がある。桑山 (2003) では、過剰適応傾向尺度の回答の妥当性を投影法的な手法による回答によって確認している。浅井 (2012) では、社会的望ましさによる影響を考慮する必要があることに言及している。
- 3) この調査では外言と内言というように「発言」と「思っていること」が区別され質問されたが、いずれも記述式で回答を求めたことから「表現する」ことには変わりがなかった。そのため、過剰適応的な傾向の高い人は、ネガティブな感情を抱いてはいるものの、記述することに抵抗があったためにそれを抑制したのか、それとも自分がネガティブな感情を抱いてい

るということに本当に自覚がなかったのか、区別ができないという方法論上の問題があることは、桑山（2003）でも言及されている。

- 4) 図中の直線の傾きや曲線の逓減傾向等は、実際の値を反映するものではなく、説明のために便宜的に設定されたものであることに注意されたい。
- 5) ただし、過剰適応尺度（石津・安保，2008）の測定値（自己評価）と過剰適応行動尺度の自己評価の「両方に」バイアスが影響しない場合にも二つの変数の関係は、直線的になる。
- 6) 平均年齢は、質問項目に含まれていなかったため不明である。
- 7) 加納（2020）では、「頼めない・断れない」という因子名だったが、項目内容を端的に表すために本研究では「抱え込み」因子とした。
- 8) 一乗項のみを含む回帰式における一乗項の偏回帰係数は直線の傾きを表すが、一乗項と二乗項が含まれた回帰式（二次関数）における一乗項の偏回帰係数は、傾きを表す指標ではない。したがって、ここでは一乗項の偏回帰係数の値の大小や正負、および有意かどうかは仮説には関係のない値ではあるが、参考までに表に記載した。

Response Bias of People with High Level of Over-Adaptation

Yoshie MATSUMOTO

Keita KANO

Nobuhito JIN

This study aimed to confirm that people with high levels of over-adaptive tendencies have a response bias in that they respond to over-adaptation scales at a lower level than their actual tendencies. A survey was conducted on 279 undergraduate students, who responded to both the Over-Adaptation Scale (Ishizu & Anbo, 2008) and Over-Adaptive Behaviors Threatening Mental Health Scale (hereinafter called “the behavioral scale”). For the latter, in addition to their own evaluations, the participants responded with their inferences of evaluations by others. Participants were asked to assume that the other person was “the one who knew them the best.” Since people with high levels of over-adaptive tendencies are resistant to responding as if someone important to them did not understand them, inferring the evaluations by others was expected to reduce their response bias. We examined the relationship between their responses comprising self-evaluations and their inferences of evaluations by others. We found that the inference of evaluation by others on the “behavioral scale,” which is unaffected by bias, showed an upward convex curvilinear relationship to the Over-Adaptation Scale (Ishizu & Anbo, 2008), which is affected by bias. This result suggests the presence of a response bias.

Keywords: Over-Adaptation, Self-Evaluation, Inference of Evaluation, Response Bias